

シュライエルマツヘルの学問論 (一)

武 安 宥

シュライエルマツヘルがハレ大学では一度も講義することのなかった『弁証法』(Dialektik)を、創設間もないベルリン大学において一八一年の講義を第一回とし以後数年おきに、一八一四年、一八年、二二年、二八年、そして三一年を最後に全部で六回おこなっている。それは彼の四十代前半から六十代前半の丁度二十年間にわたる彼の活潑な活動期のほぼ全期間にわたって繰り返し熟考を重ねつつ行われたものである。とりわけ第一回目の一年から第二回目の一四年の間で、彼は学問的にも、教義学、哲学の領域において大きな転換期を迎えており、それはいわば学体系期に向かう発端にあたる時期でもあった。

『弁証法』がこのような事情の下で、しかも彼の遺稿・聴講生のノート等から編纂されて今日の我々に伝えられているだけに、その厳正な原典批判を経てもなお、十分な理解の一致に致することは容易でなく、むしろ種々の異論・解釈の余地を残しているものであることも、止むを得ないことであろうか。しかし、そのことがかえって研究者の研究意欲を刺激し、単に『弁証法』についてののみならず全体としてのシュライエルマツヘル研究に豊かな実りをもたらす結果にもなっているように思われる。例えばそのような中でもヨナス(L. Jonas)を嚆矢とするその後の研究者、G・ヴェーリング(G. Wehring)は一四年の稿本に新しい光を投げかけて、シュライエルマツヘルの『弁証法』が時代の思想の主潮——理想主義——の影響を受けつつも、なおそれに流されることなく、その独自性を保持し、真理

の根源が我々のうちにはなく、むしろ我々を越えてあり学問と道義に基づく人間生活が究極において信仰にのみその抛り処を持つ、とシュライエルマッヘルの独自の思索の披歴に注目して、彼の『弁証法』が単なる学問方法論でないことをきわだたせたのである。さらにオーデブレヒト (Odebrecht) は、二二年の稿本を強調して、シュライエルマッヘルの思索の歩みがプラトンの対話の精神に貫かれているところから『弁証法』と『解釈学』との密接な関係に特別な価値を見出すなどこれら三人の研究者の貢献は特筆されるべきものがあると言えるであろう。とりわけ、W・ディルタイが、シュライエルマッヘルの学的体系化への絶えざる促がしの根本動機として、カントの批判的先驗哲学を掲げ、プラトンの影響の下にあってスピノーザ、フィヒテ、シエリングに対決しつつシュライエルマッヘル独自の思索を構築して晩年に経ったことに注目し、最後の三一年の稿本こそが十分に円熟した思想内容を遺す稿本であることみなして、この稿本に拠って『弁証法』のより完全な理解が可能であると、その弟子ハルベルンに推めたことは、重要な示唆を与えるものと考えられる。〔M. Redeker, Friedrich Schlegelmacher, Berlin, 1968〕

このように、『弁証法』に関して特にその原典批判においては極めて困難な諸問題があるにもかかわらず、ここでは主として、L・ヨーンナスの編纂となる『Dialektik』Berlin 1839、J・シヤール (Johannes Schurr) の『Schlegelmachers Theorie der Erziehung』Düsseldorf, 1975に依り、『弁証法』に展開される彼の思索の全体的構想とそれを貫通する真理への愛、真理に至る方法等に焦点を合わせ、また彼の一八二六年におこった『教育学講義』との関連において—この年の教育学講義に弁証法的思索の特徴が最も顕著に現われているとみなされるがゆえに—この『弁証法』をシュライエルマッヘル教育学の哲学的基礎として考察を深めたい。

「すべての学問は術知 (Kunst) であることを要し、またすべての術知は学問であることを要す……最高の学問も術知でなければならぬ」(Dialektik S. 18. S. 9)とシュライエルマッヘルは言う。おおよそ、学問の本質が知識の創造にあり、単なる保存や記録にあるのではない限り、すべて学問は術知、すなわち弁証法的 (dialektisch) 術知によつて構成されるのでなければならぬ。教育学も例外ではないが、この術知が、学問はすべて混沌から生れ形成されるものとして知を愛する (Philosophieren) ことを勧める。「すべての学問は知を愛することではなければならぬ。そうでなければ、知識は単に伝来の知識であるにすぎないから」(D. S. 10. S. 3)と言われるのであるが、それは単に知を愛しさえすればよいのか、そこに学問が直ちに成り立つのかというと、決してそうではない。単に知を愛するだけでは生命の通わない形式主義、煩悶、沈思冥想主義に墮したり詭弁に終始したりするにすぎない可能性が存しているからである。

それでは、シュライエルマッヘルにおいて知とは何であり、それを愛するとは、一体どういうことなのであろうか。言うまでもなくそれは、因襲的に伝達されて来た単なる伝統的な知識ではない。そのような知識がしばしば単なる権威として、もはや新しい建設と創造への洞察力を欠いている場合があるからである。したがって知識もまた、シュライエルマッヘルにおいては単に創られてあるものとしてではなく、創造されてゆくもの、否、創造されてゆく活動そのものとして理解されなければならない。そしてこの活動は術知 (Kunst) としての弁証法 (Dialektik) によつて、すなわち学問を建設、創造してゆく方法を通して促進されるのであるが、この弁証法は、すでにギリシヤ人によつて使用されていた *dia-logos* —— 対話者の間において *logos* (言葉・理性) を取り交わすこと——にその起源が

あるが、シュライエルマッヘルはすでにプラトン研究を通してこの *dialektikē téchnē* と呼ばれる思考、術知に十分精通していたのであり、彼において知を愛する (*philosophía*) とは、まさしくこのような術知による知の建設と創造に参与し、真知 (*enochinē*) に至るように努力することに他ならなかった。

ところでシュライエルマッヘルの弁証法は、広・狭義の二通りの仕方では理解されなければならない。まず狭義において弁証法とは、同一の対象にたいしてすべての人間の思考が一致するための一般・共通原則を定める術知である。そして、広義にはそのような一致を求める観点から、既定の共通原則を合理的に使用・適用してゆく方法である。「すべてそれぞれの知識は、二重に哲学的〔弁証法的術知〕に依存する。すなわち、どのようにして知識は既知に結びつく関係にあるか。そして、どのようにして知識は対象に知識の内的根拠と存在とに関連・規定されて関係するの か」(D.§13, S6) と弁証法の役割が尋ねられ、すべての知識が弁証法的術知との関係において、成立すると考えられる。

そこで、シュライエルマッヘルの言う知識と哲学との第一の関係について、まず考えてみると、既知から未知への進展、知識の建設・創造にあたって、知識間の関連性は考慮され、一定の標識 (*Kriterium*) が定められて、それが思考する人間のすべてに共通な尺度となることである。そのための役割を荷うと出来るのが哲学にはかならない。「すべて個々の知識は、他の知識と関連し、その真理はこの一定の関連の真理のうちにある。すなわち、それは人間の考えを一致させる普遍の原則を所有するか否かにあつて、この原則は、あらゆる異った知識の領域に同一で、ただ、哲学にのみ所屬することが可能である」(D.§13, S6) と言われるのであるから、知識はすべて哲学と関係し、思考する人間の誰もが探求し、その完成を目ざす共通の統一原則を確立することが必要となるのである。

次いで、第二の関係である。知識と対象、言い換えると、知識と存在との関係であるが、それは認識論の問題にはかならず、「知識と存在との普遍的な関係についての意識は、知識のあらゆる個々の領域を越えて、すべての人間に

同様のものである。また哲学にのみ所属することができる」(D.S13. S6)として、哲学的(≡弁証法的)術知によつて、思考と存在との一致・結合の努力が探求課題となる。

二

しかし、人間の間にその思考が完全に一致・結合をみ、完璧無欠な原則を成立させることは、極めて困難なことであると考えられる場合においては、ある程度の一致・結合をもって、共通の原則を確立する以外に方法は見出されない。この場合、この程度の一致・結合を支えて共通の原則を可能にするものは、確信の心情 (Überzeugungsegefühl) にほかならない。その意味で、その心情を共通にする人間の間のみ成立する一致・結合であり原則である。したがつて厳密には、普遍的に妥当する原則とは言えず、依然として個別的な原則・結合に止どまらざるを得ないのである。それにもかかわらず絶対的普遍的觀念のみをもって論及を進めようとはしないシュライエルマッヘルの考えに従い、なおかつ確信の心情をその内的根拠とする彼のこの種の相対的な原則・結合が理性的有効性とその内実性を有して妥当する範囲を持つ原則・結合であることを承認しなければならぬであろう。勿論、元来原理・原則がそのような心情の支えのみをもって成り立つものでないにしても、しかし、確信の心情を最も内的根拠とすることなくしては、知識は、知識として成立し得ない。知識に至る思考が根拠としてのこの根本心情を共有し、思考を同じくしてのみ、原理・原則を結実させることが可能である。そのための一連の操作は勿論同一の方法 (auf dieselbe Weise) によるものでなければならぬ。それと共に重要なことは知識 (≡原則) とその方法が共に従わなければならない目的 (Telos) の存していることである。知識や原則は、一体何のためにあるのか。その目的が問われ追求されるのであればならぬ。しかし、この追求が完全に行われることはなく、絶えず新たにくり返しおこなわれなければならない

い。それゆえに、知識と知識に致る方法にとっては、この目的追求こそが自己存在のレーゾン・デートル (raison d'être) であり、基準となる。

このように目的追求が決して完成されないという点にこそ知識とその方法にとって、哲学そのものではなく、哲学することの努力が必然的に求められてくる所以がある。シュライエルマッヘルは、哲学が決して学問として存しているとは言わない。というのも一方が他方を止揚していくのであり、どのような論理にもつまり知の本性である二面性が同時にはあり得ないのである。したがって、必然的に論争が起こり、しかもそれが決して完全無欠な論理を構築 (＝哲学) して完成することは考えられないのである。むしろ論争の生じることこそ、哲学することの証であり、哲学することの努力は、まさしくその論争を真の論争たらしめ、可能なかぎり確実な明証性に至るまでの忍耐強い探求の歩みにほかならないのである。したがって、論争のないところに哲学はないとも言えるであろう。言い換えるならば「論争が起こって同時に知への方向が十分になされ、論争を、その自然な歩みにまかせて、純粋な思考とそうでない思考とを截然と区別するところにのみ、哲学 (＝弁証法) が成り立ち、練り上げられることができる」(DS574) と考えられる。既存の知識のみが支配するところでは、もはや弁証法は成り立たないというのも、そのような知識は、単なる伝統的知識となつて、そこでは認識全般にわたつて一種の知的停滞現象が生じてくるからである。伝統的知識は決して確定的不変のものではない、という知識について本質的認識に立つならば、おのずから弁証法なくして、学問、認識界全般の成立とその発展・維持・向上は企り難いことになるであろう。「それゆえに、各々の学問すべてに中心の学問 (eine Zentralwissenschaft) がなければ、個別学問のすべては不完全なものである。その中心の学問とは、哲学にほかならない。哲学のないすべての認識すなわち、自然 (＝物理学) や人間の事実 (＝倫理学) についての認識すべては、単なる個々別々のつなぎ合わされ並列されたものにすぎないのであって、すなわち、一方から他方への単なる伝統の個別経験の並列・追順にとどまってしまう。その全知識をわれわれは、伝統的知識と名づ

けるのであるが、この知識は哲学と結びついてはじめて、高度な内容を獲得する」(D. 84 S. 8)とシュライエルマッヘルは言うのであるから、伝統的知識の存在を全面的に否定しているのではない。知識が真の知識となるためにむしろ伝統的なものに依らなければならないのであり、伝統的なものを通して、学問、認識界は発展、向上してゆくことができると考えるのである。しかし伝統的知識は文字通りただ伝え、授けられてきたものゆえ尊ぶというのではなく、さらに吟味再検討されるべきものでもあるという観点から、絶えず、哲学により弁証法の操作を経て、新たに探求され知識の最も内なる深み (die innerste Tiefe) にまで迫り、その共通の根源的連関性が把握されつづけられるのでなければならぬ。このことは、勿論教育学にも妥当することなのであるが、シュライエルマッヘルはすでに一八一三年〜一四年におこなった『教育学講義』の中で、教育学にとって、実践のすべてが弁証法(＝理論)に関係しているのではなく、教育学の学的伝統(Tradition)に関係しているもののみであって、しかもそのような意味での実践はそう多くはない、と述べている (Pädagogische Schriften, E. Weniger, S. 371) ように教育学も伝統に根ざしつつその伝統のうちに吟味、検討されるべき問題を見出し、論争を経ながらさらに、新たな理論構成を促がされ、革新を遂げてゆくことが可能となる。しかし言うまでもなく、この伝統を形成するものが一切の実践的経験にほかならないが、単なる実践的経験の寄せ集めが伝統とならないように、またそれをもって学の成立も可能と成る訳ではない。「単なる経験が学問ではない」(Päd. S. 20)と明言していることから、彼の教育学が経験や伝統を包摂しつつ、なおそれを越えてゆくべきものとして、すなわち、「教育学は……もっと思索的 (Spekulativ) でなければならぬ」(Päd. S. 373)のである。それだけに、経験と思索・伝統と革新との間をゆれ動きつつも教育学は常に、思索的であることを念頭に置いて、それらの対立的、諸要素を弁証法に取り扱ってゆかなければならない。

上述のように、思考者の間に一致しない問題点のあることが論争を生み、そのことが弁証法の必要を促がしたのであった。ということは、弁証法的手法は、思考者の間にならぬ一致・合一をみていないところに、はじめてその存在意義を有することになり、そうでないところには、もはや、論争もその手法も不要であると言われてよいことなのであろう。しかし知識が知識として成り立つためには、思考と対象との一致が思考者のすべてにおいて成り立つのでなければならぬ。したがって、その一致こそが知識のための第二の規準 (Kriterium) として規定される。まさしくそのような知識のための一致を目ざして論争も弁証法もあると考えなければならぬ。「そこでわれわれが思考と存在との関係を取り扱うならば、論争はなくなり、思考がただ純粹に、思考として、とどまる限りにおいて、差異が生じてきて……われわれが思考を存在に……関係づけると、たちまちに論争の条件すべてがととのうことになる」〔D. §586/587. S.104〕ことからして、思考者相互間にも、思考と存在との間にも当然のごとく差異・相違が生じてくるが、しかし、そのことがかえってその差異・相違を解消しようとする熾烈な知的意欲・エロースをかき立てることになるのであるから、むしろ、真知へのエロースは、そのような不一致・不完全をこそ、必然的に必要条件とするともみられるのである。しかし、その不一致・不完全は、一体なにゆえに生じるのであろうか。すなわち、問題点・論争点は何であるか。それを問い尋ね求めるところに知へのエロースとそのため弁証法が尊重され、欠かすことのできない利器となるのである。したがってその問いと探求との解答が即座に求められるところには、説明はあっても論争はなく、弁証法を駆使するところの知的究明への努力もなく、もはや真知の確立もおぼつかなくなる。

同様に、知識の根源的状态である確信 (Überzeugung) についてシュライエルマッヘルは洞察を深める。確信とい

えども、その一瞬、その一点においては、凝集された知の総体として、まさしく、知の知 (Wissen des Wissens) すなわち、共通の知 (ein gemeinsames Wissen) 知の原始とみられる。しかし、その根拠を全く感覚 (Sensation) に置いているがゆえ、究極的には不安定そのもので結局、論争へと至らざるを得なくなる。他方、無知 (Nichtwissen des Nicht-wissens) もまた畢竟自身と無知の知えの第一歩としての無知であるにほかならないのであるが、しかし、その根拠を全く知力 (Intelligenz) に置いておるがゆえに、これまた不安定であって、観念と思惟とに流れ、内実のない空虚に墮すかあるいは充実と完成を求めて、必然的に論争へと導かれてゆかざるを得ない。このようにして、仮りに前者を主体的 (実存的) 真理とし、後者を客体的真理と理解してみた場合でも、シュライエルマッヘルの考えに従うならば、依然として、それは真理の一面のみを把握したにすぎないので、真理の総体へは、本源的にはこれらの両者の統一・一致を求めての弁証法的過程を経るのだけければ到達し得ないことになるであろう。

だが弁証法による論争の展開において、知の真理への努力がいかにほどなされようとも、シュライエルマッヘルにとって人間の意識外にある絶体的知 (ein absolutes Wissen) そのものに到ることは不可能であり、その意味では、人間の知はいずれも相対的で不完全であることを免れないのである。しかし、そのことが知への努力を無意味で徒勞とするものではない。むしろ、絶対知そのものを究極の努力目的として、知の真理への探求が営まれることがそれ自体、シュライエルマッヘルの弁証法において、有意義なことであり、それこそが人間の世界と神との係わりにおいて決定的な意味をもつ活動にほかならないのである。相対の不確実な世界に知の不完全性を自覚するならば、あの知の知と言われる確信の感情 (Überzeugungsempfinden) もまた同様に極めて不完全・不安定なものであることを気づかざるを得ない。だがそれにもかかわらずというべきか、否世界と知識がそうであればあるほどと言うべきであろうか、いずれにしても、この確信の感情こそが依然として、知の根源にあって思想と知識に最も至近距離に位置し、人間を絶対的知に、さらに世界と神とに結びつける最も強い要素として強烈な根源的感情であるように思われる。シュライエル

マッヘルも「だがそのような客観的規準が指し示されないとすれば、確信の感情 (Überzeugungsgedicht) 以外には、ほかにないであろう。私はこの感情をこの場合、主体的に受けとめる」(D. §25/26, S.12-13) と断言してこの感情を主体的実存的真理への基底的感情としてこのほか尊重しているように思えるのである。勿論この場合、彼はこの感情が単なる主観主義 (Subjektivismus) に墮して、特殊と個我の恣意と同一視されることのないように配慮して、「普く知性 (Intelligenz) の現われ」(D. §87+ S.45) と観、しかもそのように普く (im Allgemeinen) と言われるところからして、全体 (Das Ganze) のために現れ、それが依然としてなお相対的であるにしても、それでもまとまった全体の代表者 (Repräsentant) として生起し成立するとみなす。したがってその意味では、すでに元からある程度の結合・一致をみている感情であるので、この確信の感情がいかにして知識、思想にまで高まり、結実し、その内容が言語化され、さらに伝播されて一大影響力となるかが問題となる。そのため、この感情が全く恣意的な臆断とされるような主観主義とか、プロタゴラスの言う「人間 (ἄνθρωπος) が万物の尺度」とかとは本質的にその性質を異にしたものであると言われなければならないであろう。「主観主義とは、大低は、これらを非難する者のやり方にも最もよく現われている」(D. §87+ S.45) とシュライエルマッヘルはいみじくも主観主義の本性のいかなるものであるかを如実に示してくれているのであるから、確信の感情を主観主義の似非感情と取り違えるようなことがあってはならない。

もっともこの確信の感情もその本性において、決して自らの絶対性を主張することは出来ない。常に一方では、他者との一致において、自己の安定、恒常性を確認しつつ、他方では他者との不一致において、その安定、恒常性が揺がされ、その安定と不安定との間を絶えず動揺・振幅を重ねるいわば二重の性格を負わされている。しかし、確信の感情は、このような主観と主観との間の交互変動過程を経てゆく中で、ある時は、主体の実存的確信の感情を確固たるものにするかと思えば、またある時は客体との齟齬・不一致・矛盾のゆえに、再三、再四主体のこの感情は引き返

し、後退を余儀なくされるのである。ところがこの客体との不一致・矛盾の克服、解明によって、かえってその後益々主体の確信の感情が強固にされ、永続的、不変の勝利 (ein ständiges Gewinnen) が確かにされるのである。ここに、確信的感情のこのような弁証法的發展展開におけるまことに神妙な働きが観取されるならば、このような感情こそが知と思索との根底にある感情として、広く高い知識に通ずる本質的原基であることが理解されるであろう。

シュライエルマツヘルが「この確信の感情は、思索的知識でも一般的知識でもつねに同じである。もっともわれわれ (『思索者』) はむしろ孤立して考察しているので生活の中で多方面からの刺激を受け、しばしば困難に会いより好都合な状況下で思索しつつ一点へと向けられるのではあるが」(D. S. 59 + S. 26) と言っているように、知の根元にあるこの確信の感情こそがわれわれの知的生活はもとより、生活一般における全く新たな生活の発端 (der Anfang eines ganz neuen Lebens) としてあるべきことに思いをいたすべきであろう。

知的探求にとってさらに大切なことは、その方法であるが、知的探求者 (『思索者』) としては現実の雑然とした経験的事実の世界にありながら、なおそれと距離を適切に保って、錯綜した現実の事態を冷静に熟視し、そのカオス (Chaos) の内より、明瞭な知識を体得することをもって相応しい方法となる。これによって、彼は確信の感情をより確かなものにし、知識の体得に関してもそこに差異 (Unterschied) のあることに気づくであろう。彼は上述のごとく、経験的世界との相対的孤立を通して、むしろ知識の明確化に到り、逆にかえって経験的世界を統一・綜観すべき一なる真知の存在することを感得するであろう。それゆえに、現実世界を一層高く広い視野から洞察することのできる優位な立場に立脚することが可能になるのである。

このように観てくると、思索者に明らかになってくる知識の差異が一方では普通の単なる経験的知識、他方では熟考 (Reflexion) によって体得される高次の知識として明かになってくる。しかし、この差異はシュライエルマツヘルにとって決して絶対的ではなく、むしろ、相対的で一方から他方へと移動可能な差異であり、相互に関連 (Zusammen-

menhang)のある差異にはかならない。したがって両者は共に接合し、継続している知識の二領域であって、しかし両者が決して同質ではないことが注目されなければならない。すなわちそのことが、ほかならぬ両知識の連続性と共に、一方の知識から他方の知識への飛躍（＝非連続、Sprung）を可能にするからである。「普通の知識が知識である場合には、思索的知識は知識ではあり得ないのであり、その逆もまた真である」（D. S. 60. S. 26）とこれら両知識がなんら類似（Analogie）を持たないこと、言い換えると、両知識の有する真理内容の差異のゆえに飛躍の可能性があることを物語っているのである。その意味でこれら両知識は本質的には矛盾する知識であるが、経験知識にとって、思索的知識への道が容易でないのに対して、後者が前者に全く無知ということはあり得ない、というような両者の関係を考えあわせみてみると、両者間には、極めて相対的な真理しか認められず、そのため必然的に論争が生じ、ひいては確信の感情に動揺が生じたり、逆に益々それが強められたりするということが起こってくるのである。

ところで、論争が生じ確信の感情が動揺する、というような事体は、勿論、対象や確信の感情それ自体に起因するのではない。というのは対象がなければ論争は起こり得ないし、論争に与しない確信の感情もあり得るのであるから。それゆえに、むしろ「知識の不完全さは確信の感情に反映しないということは、確信の感情もまた不完全なものにすぎないからであり、このようなことは思索の領域だけでなく経験の領域においても同様である」（D. S. 59. S. 25）ということにこそ論争と確信の感情の動揺の原因を求めるべきであろう。すなわち、この人間の世界に完全なものがない一つ存しないというこの一点にこそ、われわれの注目を集中させなければならぬ。とはいうものの、上述のように、経験と思索の両領域の相互関係なくして、世界は成り立ち得ないのであり、論争も確信の感情も生じ得ないこととはもとよりである。このような認識に立つならば観想デオクシに生き、思索する人間は、そうでない人間よりも、なおさらのこと、確信の力（Überzeugungskraft）において高い程度にあるのでなければならぬであろう。そうでない人間にとつては、経験が専らであり、しかも思索の検討や吟味を経ない経験に依拠することが多いと考えられるのである。

から、当然論争や弁証法とは無関係にあり、したがって、確信の力もその感情動揺もさして生じて来ないし、またその必要をも感じないことになるであろう。それに對して、思索する人間には、不完全な知と感情との根本的な自覚のゆえに、たえず自己自身においてあるいは他者において、自己と世界との反省、検討が迫られ、したがって論争と弁証法とに身を投じてゆかなければならないであろう。ここから確信の感情に動揺や逆にその感情の強化が起こつてくるのは当然のことである。観点を変えて言うならば、このような事態とその弁証法的徹底化において、彼が優位を占めているということは、なによりも思索一般に関わることへの資格認定 (the legitimization) において承認されていることであるとも考えられ得るであろう。知識や感情が不完全、不安定であるがゆえに、われわれの間に思索の差異や論争が生まれることの必然性を認めつつ、他方でそれにも拘らず、いかにして思考や論争を可能な限り一致させ、確信の感情が益々堅固にされるかが問題にされなければならない。事柄の性質上、それは当然、方法 (Methode) の問題となるのであるが、シュライエルマツヘルは端的に知識が「同じように生み出されること」(D. §89, S. 46) によって、問題の解決を企ろうとする。なる程、知識の生産に関して、そのように規定されるならば、すなわち同一の生産過程と同一の生産方法によって、同一のものが産み出されてくるのは至極当然のことであろう。

さらに彼は「どの思索者の過程もすべて、方法の問題があくまでも思索の領域と思索すの人間とに関わることであり、「生産の同一性を規定することが、知識に裏づけられた確信(理論面から)を与えるのであって、逆に確信がそのような規定となるのではない」(D. §88, S. 44, 45)。「生産の同一性を規定することが、結果の普遍性を与えているのであって、その逆ではない」(D. §89, S. 46)と述べていて、その学問上における方法の根本が思索の領域に存していることを明言している。

シュライエルマツヘルの学問・知識論が、知識、確信の感情の不完全さを抛りどころとして展開されていることは、すでに確認済みであるが、このことからしたがって理論の普遍妥当性もまた得られないことになるのである。こ

のように見てくると、それでは彼の知識・学問論においては、知識とは個人の妥当性においてのみ有効であり、結局、個々の主体の抱く感情・知覚、もしくは趣味の事柄に尽き、それは芸術や宗教同様の次元の事柄に成ってしまうのではないかも考えられてくる。しかし、シュライエルマッヘルの弁証法的知識、学問論に立脚して再考してみようならば、事情は自ずと異って彼固有の知識・学問論が現われてくる。すなわち、上述のごとく彼にあっては、あくまでも知の原点には知識の知識として、確信の感情・力があり、しかも知識が自己の思索と同一の過程を経て、他者においても現出するように要請されている。言い換えると、この確信の感情が単に個々の任意な恣意的感情として終らないためには、この感情を基にして思索された思考者の結果が、すべての他の思考者に同一の方法をもって、確得されることが前提とされているのである。とは言うものの、単に同一の結果 (Resultat) が得られればよいと言っているのではない。物事の結果を単純に受け入れるのであれば、余りにも無思慮であるばかりでなく、場合によっては、一つの結果はいかようにも手段の別なく、確得されうることも可能であるので、むしろ危険でさえある。このことに関しては、例えば単に習得された知識や因襲的・伝統的知識を想起すれば、そのような知識が真の意味での知識でないことは十分に首肯できることであろう。

シュライエルマッヘルの言う知識の本質が真に理解されるならば知識は、そのような意味での知識であってはならず、確信の感情や力に同伴されておらなければ知識は真の知識であり得ないのである。したがって主体の内面・動機との密接な結合・一致が鋭く問われることになる。その意味で、知識と確信の感情はたえず、弁証的検討・吟味にさらされ、したがって動揺すべく運命づけられており、相対的な普遍妥当性をその本質としなければならない。しかし、シュライエルマッヘルにおいて、特徴的なことは、知識・学問の単に相対的普遍妥当性が唱かれるのではなく、その知識が産み出される過程において、あくまでも一つの絶対的普遍妥当性 (eine absolute Allgemeingültigkeit) が志向されているという点において、さらにまた「完全な知識が存在し得るのは、もともと各〔対象についての〕知

識が、単に結果としてだけでなく、根拠 (Grund) としても同じように、洞見され、各人が自己とすべての他者の個人的なものをも、完全に洞見する場合であろう」(D.§91, S.47) と言われるような観点からすれば、依然として、ここには不変性・恒常性が決して見落とされることのできない要素として、厳然として存在していることを理解しなければならぬのである。そしてそのことが、また彼の知識・学問論の相対的普遍妥当性を主張し得るものとしてあると共に、彼独自の知識・学問論ともなり得ていると言われるのである。

世界における人間の働きとその結果との一切において、完全性の概念が適用不可能である、という認識にも拘わらず、思索者による知的産出の同一の過程を経て、相対的同一性 (eine relative Identität) が達成され得るのであり、達成されなければならない。学問一般の理念や、普遍妥当性・完全性からの要請に答えるには、確かにシュライエルマッヘルの知識・学問論は、相対的妥当性しか認められないがゆえに、学問論としてはあまりにも脆弱不完全のように思われる。しかし、彼としても、「現実がこの特性〔知的産出の同一性〕に完全に一致しないにしても、理念が正確に表現されるのはこの特性においてである。というのも、個人的なものと同認められるものすべしは、現実の学問から排除されるから」(D.§90⁺, S.46.47) と言って、学問一般の理念やその本質的要素を、承認しない訳ではないのであるから、彼にとっては知識・学問一般の現実が、以上のようなものであり、またそのようなものとしてはじめて可能になると考えることができるのである。

要するに、「知識とは……思考する人間が大勢いるとか考えの違いがあるとかいうことにはなく、むしろ彼等の思考が等しく同一である、ことに根拠づけられている思考のことである」(D.§93, S.48)。したがって、知識はこの同一性 (Identität) を共通にその動機 (Beweggrund) としている思考のことなのであるが、勿論、ここでもまた同一性が完全に実現されることは不可能なことであるにしても、ともかく、この同一性を共有する思考のみが収斂し、合一して知識に結実するのである。このような知識であるがゆえに、当然のことながら、知識の妥当性は限定されざ

るを得ない。それでも知識の有する普遍性 (Allgemeinheit) の度合に応じて、その妥当性が限定されるのであるから、知識はその妥当性を可能な限り最大限にまで保有するために、この普遍性に従わなければならない。それに従い、一致すればするだけ知識としてその妥当性の有効範囲も増大することになる。その意味で、より根源的には知の知である確信の感情が単なる個人的確信の感情から、一般共通、普遍的に生起し、究極的絶対的なものに連らなり得る確信の感情にまで自己拡大するものでなければならぬであろう。

— 文学部助教授 —